

3.11 ソレカラ

～障害者・
福祉職員の
「あの日」と
「ソレカラ」～



◎内海直子さん

(児童福祉施設マザーズホーム 元園長)

非常時に大きな力を発揮する「人とのつながり」。 普段から周囲と良好な関係を築いておくことが大切。



— 内海直子さん —



— 被災直後のマザーズホーム —

地震 直後

内海さんのメールが
東京消防庁のヘリを動かす
重要な情報資源となる。

地震直後、気仙沼市の海に近い場所にあった児童福祉施設「マザーズホーム」には偶然利用児がいませんでした。日頃から近隣と合同で避難訓練を行っていたため、内海さんは訓練同様、隣接する保育所で子どもたちの避難を支援し、共に近くの公民館に身を寄せました。公民館に津波が押し寄せるなか、内海さんは家族へメールで状況を伝えます。するとロンドンに住む息子がツイッターで情報を拡散、それを見た鈴木さんという方が猪瀬直樹東京都副知事(当時)にツイートを届け、さらに猪瀬副知事が東京消防庁に要請し、翌日にはヘリコプターでの救助活動が始まりました。精度の高い情報がリレーされ、400人超の命が助かったのです。

再開

“いつもと同じ”生活を意識して
心がけ、利用児と家族の
精神安定を図った。

津波で被災したマザーズホームは、3月29日から市内の老人福祉センターで事業を再開しました。当時の合言葉は“いつもと同じ”。「自閉症の子は“ここは何をする所”かが分かると落ち着きます。そこで寄付された机と椅子を置くと、子どもたちの様子がみるみる安定しました。また子どもによっては1日の流れを体で覚えている子もおり、それが変わらないことで精神の安定につながりました」と内海さん。物が無い、行く場所がない困難のなかでも、日々の生活や年間行事をいつも通り行うように努めました。

つながり

さまざまな人とのご縁から
非常時に力を発揮する
「つながり」の大切さを実感。

発災から数年を振り返り、内海さんは「人とのつながり」の大切さを改めて実感したといいます。「被災してすぐは、阪神・淡路大震災の経験から、関西の方々が“直接支援したい”と、いち早く助けに来てくれました。その後も、歌を歌ったり絵を描いたり乗馬体験をしたりと、全国からいろんな方が来てくれて。子どもたちが彼らに自己紹介をするんですけど、子どもたちは自己紹介する機会が少なかったのでもういい勉強になりました」。さらに言語療法士や臨床心理士、発達心理学の先生、音楽療法士など専門家からの支援も入り、職員や保護者の励みになりました。

マザーズホームの再建にも、さまざまなつながりがありました。日本ユニセフ協会の支援を受けて事業所が再建されたのは、2012年9月11日。落成式には、地震直後のヘリの救助に尽力してくれた猪瀬副知事と鈴木さんも駆けつけて下さり、皆で喜びを分かち合いました。

また災害に対する備えにも、内海さんはやはり「つながり」が大切だといいます。「公民館に避難している時、息子からいろんな情報を送ってもらって助かったんです。内容そのものより、つながっているという安心感でしたね」。こうした経験から、非常時にSNSなどを活用しつつ効率的に一齐につながる仕組みを確立しておくことが大切だと考えています。「まずは自分の身を守り、それから周囲の人と助け合い困難を乗り越える力を養っておくこと。職員は、日頃から利用児や保護者と一体になれるような関係作りに努めると共に、統率力を発揮することが大事だと思います。」